

平安文学語彙の研究

『紫式部日記』における「うるはし」

北村 英子

要旨

平安文学にみられる「うるはし」という形容語は、平安文学中で核となって活躍する語の一つである。この形容語について、本稿では短い作品ではあるが、平安時代の女流日記の代表作、『紫式部日記』を取り上げて研究した。この短い作品中に「うるはし」という言葉は七例見当てる。その「うるはし」という讚美の言葉の意味・対象・内容・美の種類・用法などの諸相について、用例をすべて抄出し、詳細に研究した。すると、この短い『紫式部日記』中の「うるはし」から、かねて「うるはし」美は中国的美感のする語と考えていたが、ここに唐風のことを対象に、唐風の美的表象が、「うるはし」を対象として鮮明に描かれているのは一例のみではない。そういった実例から、「うるはし」という美の種類は中国的美であることを強化することができたのは意義深い。

また、「うるはし」以外の近似した形容語についても、用法の違いなどについて触れてある。

この作品にみられる「うるはし」の対象とする、女性の装束美や黒髪のの整髪美は、この作品のみでなく、『源氏物語』や『枕草子』など、平安文学中に多く表れるものである。それらからわかること、それは、「うるはし」は人の手が加わって美しく整えられ、仕上がったものを讚美する言葉として使われる。

『紫式部日記』は寛弘五年七月から寛弘七年正月までの三年間にわたる行事・盛儀を、公的な立場から記した部分と、自己の回想や感懐を私的な立場から記した部分とから成る。特に寛弘五年の中宮彰子が敦成親王を出産し、これに関する諸行事については、多く筆を費やし、女性としての細かい観察眼で捉え、詳細に記述されている。

このような内容の女流日記作品に、「うるはし」という語は七例存在するが、どのような姿・形で表れるか。

「うるはし」の意味・対象・讚美の内容・用法などの諸相について追究していく。

では、用例を逐次揚げながら検討していく。

先ず、若宮が誕生しお湯殿の儀式の場面である。

- ① よろづのもののくもりなく白き御前に、人の様態やうたい、色あひなどさへ、けちえんにあらはれたるを見わたすに、よき墨絵すみゑに、髪かみどもをおほしたるやうに見ゆ。いとどものはしたなくて、かかやかしき心地すれば、昼はをさをささし出でず、のどやかにて、東ひむがしの対たいの局つぼね

より、まうのぼる人々を見れば、色ゆるされたるは、織物の唐衣、おなじ桂うづちどもなれば、なかなかうるはしくて、心々も見えず。⁽¹⁾

この当時、親王お誕生後七日間の儀式では、調度や女房たちの装束にいたるまで、一切の物が白一色に統一される。その中で人物の黒髪だけが、黒々ときわだつて見える。白と黒の対比を通して、それが墨絵のようだと捉えているが、墨絵すなわち唐絵を思わせる描写である。

こういった場面に用いられている「うるはし」は、女房たちの装束、唐衣から桂にいたるまで、綾織物で白色一色に統一され、大勢の女房たちの装束の色が、同色で揃った美しさを、「うるはし」と捉えている。公的な慶事の儀式のため、一定の規則に従って人的作用により整えられ、格式張った美である。したがって、「うるはし」は格式のあるきちんとした雰囲気の中で創造されるものである。そして、こういった厳格な儀式を伴い唐絵を思わせるような端正な光景を「うるはし」というが、この美は日本的な美というよりは、中国的な美の語感がする。これについては、拙稿「平安文学語彙の研究―『竹取物語』における“うるはし”」⁽²⁾中においても記してある。

以上、一番目の用例を検討してきた結果、本用例中の「うるはし」の語意は、文脈に沿って考えた場合、乱れのない美、すなわち、「端正」という意味が、最も適切である。

次に二番目の用例の検討に移る。

② 七日の夜は、おほやけの御産養おほんぶやたひ……今宵こよひ

儀式は、ことにまさりて、おどろおどろしくののしる。

御帳みちやうのうちのぞきまゐらせれば、かく国の親ともてさわがれたまひ、うるはしき御けしきにも見えさせたまはず、すこしうちなやみ、おもやせて、おほとのごもれる御有様、つねよりもあえかに、若くうつくしげなり。小さき灯炉とうろを御帳のうちにかけたれば、くまもなきに、いとどしき御色あひの、そこひもしらずきよらなるに、こちたき御髪は、結びてまさらせたまわざなりけりと思ふ。

若宮お誕生七日目の御産養の朝廷行事である。時は九月十七日夜のことである。

紫式部は御産養の盛儀中でも、中宮彰子を気遣い、御帳台の中をおのぞき申しあげた。すると、産後の中宮は国母として、もてさわがれなさるような「うるはしき御けしき」にはお見えにならなかったのである。普通国母といえ、格式張って重々しく立派な感じがするが、この場面では、疲労に面やせてお休みになつていらつしやるご様子は、弱々しく「うるはし」様子ではなく、むしろ、「若くうつくしげ」であり、お顔色は「きよら」な美であり、黒髪は、結い上げなさると美しさが「まさらせたまふ」とあり、中宮の美しい部分部分を、各各の美的語詞で表現している。

このように検討してみると、「うるはしき御けしき」とは、「荘厳なご様子」と解釈するのが最も相応しい。皇子の母という女性として最高位の重々しく立派な人に対して、普通は用いるのだが、この一場面のみは、産後の弱々しい様子で通常の中宮としての威厳さが消失しているのであ

る。

次は三番目の用例である。

③ その日、あたらしく造られたる船ども、さし寄せさせて御覧す。

龍頭鰯首の生けるかたち思ひやられて、あざやかにうるはし。

行幸は辰の刻と、また暁より、人々けさうじ心づかひす。上達部

の御座は、西の対なれば、こなたは例のやうにさわがしうもあらず。

内侍の督の殿の御かたに、なかなか人々の装束なども、いみじうととのへたまふときこゆ。

行幸の当日、十月十六日のことである。道長は新しく造られた船どもを、池の水際にさし寄せてご覧になる。その船とは龍頭鰯首の船であるが、龍頭や鰯首の生きている姿が想像されるほど、「あざやかにうるはし」と讚美している。

龍頭鰯首とは、

二隻一对の裝飾船で、船首にそれぞれ竜と鰯の頭の彫物がついている。竜船には唐楽、鰯船には高麗楽の樂人が乗る。鰯は想像上の水鳥でよく風に耐えて飛ぶという。

とあり、船首についている竜と鰯の頭の彫物が生きているような姿を讚美しているが、その船には唐楽、高麗楽の樂人が乗り、和楽でないことが注意を惹く。因に『源氏物語』に次のように表れる。

○ 三月の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よりこ

とに尽くしてにほふ花の色、鳥の声、他の里には、まだ古りぬにやとめづらしう見え聞こゆ。山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど、若き人々のはつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる舟造らせたまひける、急ぎさうぞかせたまひておろし始めさせたまふ日は、雅樂寮の人召して、船の樂せらる。親王たち、上達部などあまた参りたまへり。(「胡蝶」)

「胡蝶」の巻の冒頭文である。六条院の春のご殿は、三月の二十日過ぎて、お庭の風情は変ることなく美しい。源氏は唐風の船をお造らせになり、それに装いをつけさせて池に浮べ船樂をお楽しみになる場面であるが、龍頭鰯首の船を、「唐めいたる船」とあるのは注意を惹く。また、引き続き次のように描写されている。

○ 龍頭鰯首を、唐の装ひにことごとしうしつらひて、楫とりの棹さす童べ、みな角髪結ひて、唐土だたせて、さる大きな池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国に来たらむ心地して、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。中島の入江の岩蔭にさし寄せて見れば、はかなき石のただずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり。(「胡蝶」)

この場面の龍頭鰯首と唐との関係の描写について取り上げてみていくことにする。

龍頭鰯首の船は、唐風に派手に飾りつけがしてある。すなわち、唐風とはあざやかに彩色してある派手なものをいう。そして、楫をとり棹を

さす童子は皆髪のを角髪に結っているが、この少年の角髪の髪型は、中国的な結び上げた頭髪を指す。こういった中国的な髪型をした男童は、装束も唐風に装わせて、竜頭鷓首の船にのり、大きな池に漕ぎ出たので、これを見ていた女房たちは、まるで中国にでも来ているような感じがして、しみじみおもしろく思っているのである。

このように『源氏物語』の「胡蝶」の巻の冒頭文は、竜頭鷓首の船による、紫上方のぎょうぎょうしい船業の催しであるが、この一場面はまるで中国にいるような思いがする程、中国的雰囲気が辺り一面にただよっている。「うるはし」はこういった雰囲気から生れてくるあざやかな派手な美しさをいう。

こういったことから、今検討中の三番目の用例も、この『源氏物語』の「胡蝶」の巻の場面から、中国的雰囲気がただよう場面であることが理解出来る。したがって、用例三番目中に用いられている「うるはし」は、中国的雰囲気の派手な美しさの中から生れた美で、中国的美の特色を有する。こういった類の用例はこの他にも見当たる。同じく『源氏物語』である。

○ 絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとほひすくなし。太液芙蓉、未央柳も、げにかよひたりし、容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。(桐壺二)

「桐壺」の巻の楊貴妃の美しさを誉めた場面である。これについては拙稿『古代中世文学論考』(第十五集)について記したが、唐風の装束姿の楊貴妃の美しさを「うるはし」で捉えている。恐らくその唐風の装束姿とはあざやかな色相の装束をまとい、際立つて美しい姿を「うるはし」で表現している。ここにおいても、中国的雰囲気の中から生れた派手な美を「うるはし」といい、中国的な美感のする美的表象である。

この他、一番目の用例においても、「うるはし」は唐風なものを対象としてみえてきた。

こういうように「うるはし」は、唐風なものを対象として用いられるものであることは、所処にみられる。

したがって、今論じている三番目の用例もまた、唐的なものを対象とし、「うるはし」は誉め讃える言葉として用いられている。

ここで「うるはし」の上接語に着眼してみたい。「あざやかにうるはし」とあり、「うるはし」ものは、「きわだつてくつきり美しいもの」、そういった視覚に映える派手な美しさを、「うるはし」ということがわかる。いわゆる「なまめかし」とは対極にある美に相当し、「きよら」とは類似する美である。

「あざやかにうるはし」を現代語に直すなら、「竜頭や鷓首の生きた姿が想像されるほど」きわだつて美しく立派である」となる。

次に四番目の用例の検討に移る。

④ 御帳の西面に御座をしつらひて、南の廂の東の間に、御椅子を

立てたる。それより一間へだてて、東にあれたるきはに、北南のつ
まに御簾をかけへだてて、女房のみたる、南の柱もとより、簾をす
こしひきあけて、内侍二人出づ。その日の髪上げうるはしき姿、唐
絵ををかしげにかきたるやうなり。

三番目と同じ十月十六日の土御門邸行幸の場面が続くものである。

(中宮)の西側に天皇のご座所を設けて、南の廂の東の間に、ご椅子
が据えてある。そこから一間を隔てて、東に離れている部屋の境に、北
の隅から南の隅まで御簾をかけて仕切つて、女房たちが座っていた。そ
の南の柱のところから、簾を少し引き上げて、内侍二人が出てくるが、
その内侍は、左衛門の内侍と弁の内侍の二人である。この内侍が髪を結
い上げている姿を「うるはし」と讚美し、その髪上げをした「うるはし」
女性の姿は、まるで唐美人画のように美しいのである。

「髪上げうるはしき姿」について、萩谷朴著『紫式部日記全注釈』(角
川書店)に詳しい考察がある。

……劍璽の内侍として最も公式な晴れの容粧をしているわけ
であるから、髻はもちろん、鬘も前髪も鬘もあり、蔽髪・釵
子・刺櫛・簪などをつけた唐風の本格的な髪上げ姿であると思われ
るからである。すなわち、唐風のスタイルは、いかにも格式張った
感じがするものであって、髪上げ自体が「うるはし(端麗)」という
べきであつたから、「うるはしき髪上げ姿」といっても結果は同じな
のであるが、整髪スタイルそのものがいかにも端麗という印象を与
えるので、「髪上げうるはし」と、名詞を先に出したのであろう。

とあり、唐風の髪上げスタイルは格式張った感じがする。それを、「うる
はし」というと、解いていらつしやる如くである。

また、唐絵については

……この場合の劍璽の内侍二人の容粧を譬えるのに用いられ
た唐絵は、その中でも、唐美人を描いた唐絵に限定されよう。……
とあり、第六十五回として、唐美人図(吉祥天女像・薬師寺蔵)を載せ
ておられるが、ふつくらとした美人顔にオールアップに結髪している吉
祥天女は、いかにも格式張ったお姿である。

萩谷朴氏のこのお説を拝見する前は、万葉集の若々しい女性達の結髪
した髪型姿を想像していたが、いかがなものであろうか。

結髪については、『枕草子』中にもみられ、拙稿でも記したことがある。^⑦

……心かけたる人は、まことにいとほしと、思い嘆きたるこ
そをかしけれ。いとうるはしう、長き髪を引き結びて、物つくどて、
起き上りたる気色も、らうたげなり。(二八三段)

「病は」の段に表れる「結髪」を「うるはし」と讚美している場面で
ある。

病人の黒髪はとても整つて美しい。その長い黒髪を結つて、ものを吐
くというので、起き上つている様子も可憐である。と、長い黒髪を結つ
た例がみられるが、この例は病に臥している時であるから、恐らく長い
髪が乱れないように、また、臥すのに邪魔にならないように結い上げた
のであろうが、それが「うるはし」と讚美されている。結髪スタイルは、
『紫式部日記』の四番目の結髪スタイルと異なるものであろうが、いず

れも「うるはし」と視覚美で捉えている。

『紫式部日記』の四番目の用例にもどるが、内侍は公式な晴れの場に相応しく、唐風の本式な髪型に結い上げたに違いない。すなわち、格式張った雰囲気に似合う、格式張った髪型の容粧をしているのである。このように検討を加えてみると、この描写中の「うるはし」も唐風のもを対象として用いられているといえる。そして、この「うるはし」は「端麗」と訳すのが最も相応しい。

次は五番目の用例である。

⑤ 今宵、少輔の乳母、色ゆるさる。ただしきさまうちしたり。宮抱きたてまつれり。御帳のうちにて、殿の上抱きうつしたてまつりたまひて、ぬざり出でさせたまへる火影の御さま、けはひことにめでたし。赤いろの唐の御衣、地摺の御裳、うるはしくさうぞきたまへるも、かたじけなくもあはれに見ゆ。大宮は葡萄染の五重の御衣、蘇芳の御小桂たてまつれり。殿、餅はまゐりたまふ。

十一月一日の御五十日のお祝の場面である。今夜、少輔の乳母は禁色の着用を許される。いかにも端正な様子をしている。その少輔の乳母が若宮をお抱き申し上げて、御帳台の内側で、殿の北の方がお抱き取り申し上げられて、几帳の間からにじり出ていらつしやったその北の方の燈火に映えるご容姿、ご様子は格別ご立派である。赤色の御唐衣に地摺の御裳を「うるはしく」着用していらつしやるのも、もったいなくもあり、感慨深くも見られる。

こういつた描写は、中宮の母倫子が、娘中宮を敬って、唐衣・裳の正装を「うるはしく」お召しになっていらつしやるので、もったいなくもあり、感慨深くもあつたのである。

また、若宮の母となつた中宮様は葡萄染の五重の桂に、蘇芳の御小桂をお召しになっていらつしやる。殿はご自分で若宮にお餅をお差し上げになる。

若宮誕生から五十日目のお祝の儀式のため、皆正装するのであるが、とりわけ中宮と中宮の母の装束に関することが、詳しく描かれているのである。儀式という格式張った雰囲気の中で、女性としての最高位の方の方が、端正に格式のある装束をまとうのである。

装束に関するものに「うるはし」が用いている例は少なからず見当た

る。

○ 暁に帰らん人は、装束などいみじううるはしう、烏帽子の緒、元結固めずともありなん、とこそおぼゆれ。(六〇段)

○ 御形の宣旨の、上に、五寸ばかりなる殿上童の、いとをかしげなるを作りて、みづら結び、装束などうるはしくして、(二七八段)

○ 昨日は車一つにあまた乗りて、二藍の同じ指貫、あるは狩衣など乱れて、簾だれ解きおろし、もの狂ほしきまで見えし君達の、齋院の垣下にとて、日の装束うるはしうして、今日は、一人づつさうざうしく乗りたる後に、をかしげなる殿上童乗せたるもをかし。(二

○八段

など、『枕草子』にみられる。⁽⁹⁾

こういった例は『源氏物語』にもみられる。⁽¹⁰⁾

○ 絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとほひすくなし。太液芙蓉、未央柳も、げにかよひたりし、容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、(「桐壺」)

○ 御尼額ひきつくろひ、うるはしき御小桂など奉り添へて、子ながら恥づかしげにおはする御人ざまなれば、まほならずぞ見えたてまつりたまふ。(「少女」)

○ よき若人ども三十人ばかり、童六人かたほなるなく、装束なども、例のうるはしきことは目馴れて思さるべかめれば、ひき違へ、心得ぬまで好みそしたまへる。(「宿木」)

など、装束に関するものに「うるはし」を用いて讚美している例は、所処にみられる。

『紫式部日記』の五番目の用例も、儀式という厳肅な場に相応しく、礼装を「うるはしく」着用しているのである。したがって、この場合は格式高い乱れない儀式において、きちんと礼服を人の手によって着付

され、乱れないようにきれいに仕上げられている。このように「うるはし」は人の意志などが向けられたものに対して、きれいに整えようという意識作用が働き、人の手によって完成された整った美に対して「うるはし」は使われる。であるから基本的に目が向けられる範囲は狭いものとなる。しかし、その辺りの雰囲気や環境などと関係し、広い場と相互作用をおよぼし合いながら、「うるはし」美は存在する場合が少なくない。因に、再び五番目の用例をみていこう。「うるはし」語の近くに「めでたし」という語が見当たるが、「うるはし」も「めでたし」も語釈すると、例えば、「立派だ」という意味を両語が包含している。文脈に沿って「うるはし」を語釈すると、場合によっては「立派だ」と訳が付き、「めでたし」も場合によっては「立派だ」と訳すことが出来る。「うるはし」も「めでたし」も共に相似た性格を多少とも包含していることが認められる。この五番目の用例に表れる。

○ みざり出でさせたまへる火影の御さま、けはひことにめでたし。の「めでたし」はどうであろうか。北の方がお抱きとりになって、にじり出ていらつしやつた燈火に映えたお姿やご様子は格別立派である。と解釈することが出来、「めでたし」は「立派である」という意味である。対象は「うるはし」の方は狭い範囲で捉えはつきりしているが、「めでたし」の方はやや広い範囲で捉え、焦点がややはつきりしない。このような用法の相異があるといえる。

次は六番目の用例である。

⑥ 式部のおもとはおとうとなり。いとふくらげき過ぎて肥えたる人の、色いと白くにほひて、顔ぞいとこまかによくはべる。髪もいみじくうるはしくて、長くはあらざるべし、つくろひたるわざしで、宮にはまゐる。ふとりたる様態の、いとをかしげにもはべりしかな。まみ、額つきなど、まことにきよげなる、うち笑みたる、あいまう愛敬もおほかり。

寛弘六年正月、新年御戴餅いたたけもちの儀式の場面である。

戴餅の儀式の時に、役付きを務めた人達の装束を細叙していたが、だんだん女房批評に移ってゆく。

「式部のおもと」は中宮女房で、宮の内侍（橘良芸子）の妹である。この人は全くふつくらとしすぎるほど太っている人で、色は非常に白くつややかで、顔はよく整ってよい器量である。髪も非常に「うるはしく」、長くはないのでしょうか。かもじなどでつくろって、宮仕えには出ていない。太った体つきがとても魅力的であった。目もとや額の様子などは、ほんとうにきれいで、につこりした時は、愛嬌たっぷりである。

このような女性で、毛髪の美を「うるはし」という言葉で表現している。当時、女性の長い黒髪は最高の美人の条件であったが、この式部のおもとは長くなく、短いながら美しい毛髪を保っていたようだ。毛質は直毛で、粗硬であった毛髪を洗髪後、水油を用い何度も何度も梳いて黒髪になじませ、光沢を出し整髪したことが知られているが、ここにおいても、人の手が加わって美しく整え仕上げられた頭髪を「うるはし」という。

整髪された黒髪の美を、「うるはし」美で捉えている描写は『枕草子』に多くみられ、拙稿『枕草子』の語詞「うるはし」（樟蔭国文学第三十八号）で追究してある。また、『源氏物語』においても、黒髪の美を「うるはし」で捉えている場面がある。これについては、拙稿『源氏物語』における「うるはし」（『古代中世文学論考』十五集）で考察してある。このように整髪した頭髪美を「うるはし」と表現している場合は、案外多くみられる。

この六番目の用例も、式部のおもとという女性の毛髪は、長くはないようであるけれど、人の手によって美しく整髪され、光沢があつて美しかったのであろう。「うるはし」を現代語に置き換えると、「端正で美しい」となる。

次の七番目は、最後の用例である。

⑦ 若人わかひとの中もかたちよしと思へるは、小大輔こだいふ、源式部げんしなど。大輔はささやかなる人の、様態いといまめかしきさまして、髪うるはしく、もとはいとこちたくて、丈に一尺余あまりたりけるを、おち細りてはべり。顔もかどかどしう、あなをかしの人やとぞ見えはべる。かたちは直なおすべきところなし。

これは、用例六番目の連繫文である。

六番目の用例と同じく、中宮女房の批評である。その女房とは小大輔と源式部の二人で容貌が美しく若い。この内小大輔こたゆうのみの人物批評が記されているのであるが、小大輔は小柄で、体つきはたいそう現代的な様

子をしていて、髪は「うるはしく」、以前はとでもたくさんあって、丈に一尺以上も余っていたのに、今では少なくなっている。顔も才気があふれ、まあ何と美しい人だろうと見られる程である。容貌は直すところがない。

このように、見目麗しい小大輔の頭髪は、以前はたくさんあって、丈に一尺以上も余る程長かったが、今では少なくなっている。「うるはし」美を保っている。

当時の成人女性の毛髪は、普通長く垂髪にしていた。その長く多い粗硬の毛髪は、常に惜しむことなく手入れをし美しく整えられるのであるが、その手入れをした黒髪は、つやつやと光沢があつて人見を惹くものであつた。

この小大輔の黒髪も恐らく、このようにつやつやとした長い垂髪で魅力的なものであつたにちがいない。

成人女性の長い垂髪を、「うるはし」と讚美している例は『枕草子』に多く表れることは、先にも述べた如くである。

七番目の用例の「髪うるはし」も、人の手が加わつて美しく整髪されたものである。この語を現代語に置き換えると、六番目と同じく「髪は端正で美しい」となる。

以上『紫式部日記』に表れる七例の用例を詳細に検討した結果、「うるはし」語は、作品の前半部分、すなわち、若宮誕生の儀式に関する場面に表れる。七例中の六例が女性に対して「うるはし」美が向けられている。平安文学において、今まで調査研究した中では、やはり女性の毛髪

美や装束美を「うるはし」美で捉えている例は多くある。本稿においても然りである。そして、これらは格式高い儀式の場面に關係し、いずれも、人の手が加わり、美しく整え仕上げられたものに多く「うるはし」は用いる。

本稿で特に記しておきたいことは、「うるはし」美は、かねがね中国的美感がするということ、拙稿「平安文学語彙の研究―『竹取物語』における「うるはし」⁽¹⁾」などで取り上げて論じてきたが、本稿において用例、一番目・三番目・五番目からやはり、中国的美であることがこの実例から鮮明になり、今までの考えをより強化でき意義深く思う。

注

(1) 『紫式部日記』の引用本文は以下全て新編・日本古典文学全集(小学館)に拠る。現代語訳、頭注等全般にわたって同書を参考にした。

(2) (11) 北村英子「平安文学語彙の研究―『竹取物語』における「うるはし」」(大阪樟蔭女子大学論集第四十四号)

(3) 『紫式部日記』新編・日本古典文学全集(小学館)一五三頁の頭注十四に拠る。

(4) (5) (6) 『源氏物語』の引用本文は、新編・日本古典文学全集(小学館)に拠る。

(7) (9) 北村英子『枕草子』の語詞―「うるはし」(樟蔭国文学第三十八号)

(8) 『枕草子』の引用本文は「和泉古典叢書1―『枕草子』(増田繁夫校

注)に拠る。

(10) 北村英子『源氏物語』における“うるはし”『古代中世文学論考第
十五集』(新典社)

※ その他、全般にわたって、萩谷朴著『紫式部日記全注釈』(角川書店・
新潮日本古典集成『紫式部日記 紫式部集』(新潮社)等を参考にした。